

小林祥次郎

日本語のなかの
中国故事

知っておきたい二百四十章

勉強出版

はじめに

漢文の中にある故事成語はわたくしたち日本人の頭に深く強く刻み込まれているものが多い。「学んで時に之を習ふ」とか「国破れて山河在り」とかのほうが「東の野に炎の立つ見えて…」や「つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて…」などよりもすぐに思い浮かぶ。『論語』にしても唐詩にしても、中国の古典なのだが、日本人の骨肉に沁み込んでいるのだ。

これまでに「語源探索」というサブ・タイトルを付けて、俗語と言えるような単語の語源を書いてきた。今度は漢文からの単語や成句を扱った。これまでの俗語とは趣を異にするようだが、わたくしにとっては、身近なことばの語源ということで関心があるのだ、俗語の場合とさほどの違いは無いと思っている。

中国故事を扱った本はこれまでにいくつも出ている。大部の辞典も少なくない。そういう状況なのに、屋上屋を重ねるものを書こうとしたのには、二つの意図がある。

一つは、その語句が語られた前後の状況を詳しくすることだ。だががどういう場面でどんな意図で語ったのかを知りたかった。例えば「矛盾」の話は広く知られている

が、出典の『韓非子』では儒教を批判するために語ったものだったことはあまり知られていない。

もう一つは、日本での例を上げることが心掛けたことだ。それによって、日本人がどんな成語を好んで取り入れたのか、どのように意味をずらして用いているのかなどを考えたかった。そのために、日本での例のなるべく古いものと、近代の作品に見えるものを出来るだけ引用するようにした。もともと老人のわたくしはあまり新しい本を見ていないから、明治・大正の例が多い。

引用には夏目漱石の作品が多いのは、わたくしの好きな作家だからでもあるが、漱石が近代ではいちばん読まれているだろうと考えていることにもよる。明治以前の作品については、なるべく古いもの、なるべく分かりやすいものと心掛けたが、漢語なので漢詩文が多くなり、少々カタいものとなった。

図版のほとんどは明の王圻おうきの『三才図会』ものを用いた。肖像などは想像のものであるが、それぞれが当時の中国人の考えた英雄たちの姿と考えてこれを用いた。

いくつかの項目に、現代中国語でも用いている語句を挙げた。簡体字は日本で用いている字に改めたものが多い。

● 歴史

壁を抱いて罪あり 026

臍を噬む 027

未亡人 028

風馬牛 030

衣食足りて榮辱を知る 031

怨み骨髓に入る 033

鼎の軽重を問う 034

食指が動く 036

病膏肓に入る 038

百年河清を俟つ 041

折衝 042

骸骨を乞う 044

千慮の一失 045

塩梅 046

日暮れて塗遠し 048

同病相憐れむ 050

大義親を滅す 023

流言蜚語 020

驥尾に附す 018

天道是か非か 015

指南 012

虎の巻 009

覆水盆に返らず 007

太公望 005

酒池肉林 003

臥薪嘗胆 053

狡兎死して走狗烹らる 055

満を持す 057

顰に倣う 058

呉越同舟 061

彼を知り己を知れば、百戦して殆からず 062

風林火山 063

正堂堂 065

始めは処女の如く、後には脱兎の如し 066

士は己を知る者の為に死す 067

墨守 069

蛇足 072

虎の威を借る狐 075

騏驎も老いては驚馬に劣る 077

鶏口と為るも牛後と為る無かれ 079

枕を高くして臥す 081

切齒扼腕 083

漁夫の利 085

完璧 086

刎頸の交わり 088

百発百中 090

囊中の錐 092

奇貨居くべし 094

一字千金 095

舟に刻みて剣を求む 097

掣肘 098

立錐の地 100

傍若無人 102

泰山は土壤を譲らず 103

断じて行えば鬼神も之を避く 106

鹿を指して馬と言う 108

燕雀安くんぞ鴻鵠の志を知らんや 109

齒牙に掛ける	111	左袒	138
先んずれば人を制す	112	前車の覆るは後車の戒め	140
一敗地に塗れる	114	石に立つ矢	142
忠言は耳に逆らえども行いに利あり	115	桃李もの言わざれども下目ずから蹊を成す	144
法三章	118	門前雀羅を張る	145
大行は細謹を顧みず	119	曲学阿世	149
錦を衣て夜行く	120	要領	152
骸骨を乞う	122	傾城・傾国	154
乾坤一擲	124	細君	157
四面楚歌	125	素封	158
捲土重来	128	雁信	159
国士無双	130	九牛の一毛	160
背水の陣	131	百聞は一見に如かず	162
敗軍の将は兵を語らず	133	秋高く馬肥ゆ	163
多多益ます弁ず	135	酒は百薬の長	164
左遷	137	烏合の衆	165
糟糠の妻	167	水魚の交	192
物色	169	七歩の才	193
遼東の豕	170	螢の光窓の雪	196
虎穴に入らずんば虎子を得ず	172	漱石枕流	200
水清ければ魚棲まず	173	断腸	201
盤根錯節	175	竹馬の友	203
天知る、地知る、子知る、我知る	177	蒲柳の質	204
五里霧中	180	閨秀	206
跋扈	182	画龍点睛	207
登龍門	183	創業と守成と孰れか難き	208
兄たり難く弟たり難し	185	梨園	210
白波	186	一網打尽	211
鶏肋	187		
月旦評	188		
危急存亡	189		
三顧の礼	191		

●思想

『易』……………	217	庭訓……………	238
亢龍悔い有り	220	道聴塗説……………	239
積善の家には必ず余慶あり	221	女子と小人は養い難し	240
虎の尾を履む	223	『老子』……………	243
同人	225	天長地久	244
観光	226	功成り名遂げて身退くは天の道	245
虎視眈眈	227	大道廢れて仁義有り	247
君子は豹変す	229	大器晩成	248
断金の交わり	230	千里の行も足下より始まる	250
『論語』……………	233	天網恢恢疎にして漏らさず	251
木鐸	233	『莊子』……………	253
敬遠	234	庖丁	254
後生畏るべし	236	螻蛄の斧	255
		無用の用	258
		莫逆の友	260
命長ければ辱多し	262		
井の中の蛙	264	寡は衆に敵せず	288
衛生	265	恒産無ければ恒心無し	290
大同小異	267	匹夫の勇	291
『列子』……………	268	浩然の気を養う	293
男尊女卑	268	助長	294
杞憂	270	大丈夫	296
朝三暮四	271	自暴自棄	300
愚公山を移す	272	去る者は追わず	301
知音	275	似而非なり	303
多岐亡羊	277	孟母三遷	304
疑心暗鬼を生ず	279	『荀子』……………	309
『孟子』……………	281	性悪説	309
五十歩百歩	282	青は藍より出でて藍より青し	310
君子は庖厨を遠ざく	284	是是非非	311
木に縁りて魚を求む	286	濫觴	312
		『韓非子』……………	315

逆鱗 315

矛盾 316

株を守る 318

『礼記』…………… 320

弱冠 320

不俱戴天 322

苛政は虎より猛し 324

男女七歳にして席を同じくせず 325

玉琢かざれば器を成さず 326

嘉肴有りといえども食らわざればその旨きを
知らず 327

亡国の音 328

君子は其の独りを慎む 330

小人間居して不善を成す 330

心ここに在らざれば、視れども見えず、聴けど
も聞こえず、食らえどもその味を知らず 332

拳拳服膺 333

『淮南子』…………… 335

鹿を逐う獵師は山を見ず 335

玉に瑕 336

陰徳陽報 339

人間万事塞翁が馬 340

『論衡』…………… 343

夏炉冬扇 343

『近思錄』…………… 345

一辺倒 345

●文学

君子の好逑 351

輾転反側 353

琴瑟相和す 354

偕老同穴 355

切磋琢磨 359

他山の石 361

戦戦兢兢 364

多士濟濟 367

小心翼翼 368

羹に懲りて膾を吹く 370

巫山の雲雨 371

瓜田に履を納れず。李下に冠を正さず 374

去る者は日に以て疎し 379

渇しても盗泉の水を飲まず 381

千載一遇 382

破瓜 383

歲月人を待たず 384

桃源郷 386

夫唱婦随 389

人生意気に感ず 391

青雲の志 393

人を射んとせば先ず馬を射よ 395

明眸皓齒 397

古稀 400

麒麟児 401

馬耳東風 403

人後に落ちる 405

一挙手一投足 406

青天白日 408

推敲 410

汗牛充棟 412

人口に膾炙する 414

一将功成りて万骨枯る 415

佳人薄命 417

春宵一刻值千金 419

口は禍の門 423

紅一点 424

青天の霹靂 426

あとがき 429

● 索引

語句索引 1

人名索引 8

書名索引 17

●
歴史

● 酒池肉林^{しゅちにくりん}

長谷川時雨『旧聞日本橋』（勝川花菊の一生）に、

ある時、急に社会が外面的に欧化心酔した。それは明治十八年頃のいわゆる鹿鳴館時代で、晩年にはあんなゴチゴチの国粹論者、山県元帥^{やまがたげんてい}でさえ徹宵ダンスをしたり、鎗踊り^{やうおどり}をしたという、酒池肉林^{しゅちにくりん}、狂舞の時期があつた。

とある。「酒池肉林」という熟語は贅沢を尽くした酒宴を言うのだが、それにワイセツな気分を感じるのはわたくしだけだろうか。「肉」に女の肉体を想像するからだ。

殷王朝^{いん}の最後の帝王である紂^{ちゆう}は、弁舌さわやかで行動はすばやく、才能も腕力も人に勝れていた。智恵は臣下の諫めをふせぎ、言葉は自分の非を飾り立てることが出来た。

その紂は、酒を好み淫楽^{いんらく}（乱れ楽しむこと）で、妲妃^{だき}という女を愛して、その言うことには従った。新しく淫らな歌謡を作らせ、税を厚くし、沙宮という離宮で、酒で池を作り、肉を懸けて林とし（以酒為池、縣肉為林）、男女を裸にして追いかけあいさせ、昼夜の別なく長い酒宴を張った。人民は怨み^{うらみ}、諸侯の中には叛くものも出たが、紂は刑罰を重くした（史記・殷本紀）。そんなわけで、「肉」は女の肉体ではなく、食肉のこと、たぶん豚肉でもあろうか。人の肉体のほうはその後の裸の男女に迫りかけっこをさせたというほうにある。

それにしても、だいぶ悪行を並べたようだが、『史記』（殷本紀）には、もつとたくさん記してある。

紂はやがて周の武王に亡ぼされ、殷王朝は終わる。紀元前一〇四六年のことかと推定されている。

紂は悪王の見本とされていて、暴虐の天子の例として、夏王朝の最後の王の桀と並べて「桀・紂」と言うこともある。「紂」という字について、六朝宋の裴駰の注釈『史記集解』では、義を「残い善を損なうのを紂と言うのだ」としている。この字は糸偏であることから分かるように、本来は牛馬の尻にかけるしりがいいという組み紐のことだ。

歴史は勝者の記録で、負けた者はほとんど悪者にされてゆくものだ。ましてこういう話には尾緒がついてくる。紂の悪名は雪達磨式に増えてきたのだろう。『論語』（子張）には、孔子の弟子の子貢が「紂の不善はそれほどひどくはないのだ。」と言ったとある。『列子』（楊朱）には、楊朱（BC四世紀）が、天下の美は舜・禹（どちらも古代の伝説の聖君主）・周公（周の武王の弟で大臣として周王朝の基礎を築いた）・孔子に帰し、天下の悪は桀・紂に帰すると述べている。後漢の王充の『論衡』（語増篇）には、当時の伝説によって「酒池」や「肉林」のことを記して、いくつかの理由を挙げて「酒池牛飲」は事実でない、「肉林」というのは、「是れ酔ひて淫戯を楽しんで節度無きを為ふなり」と説明している。そうだとすれば、最初に書いたわたくしのワイセツ

な推測も当たっていることになるか。

●太公望

紀元前一三〇年ころ、殷王朝の末期に、呂尚という人がいた。困窮してしかも年老いて、魚釣りをしながら周の西伯に近づきたいと思っていた。

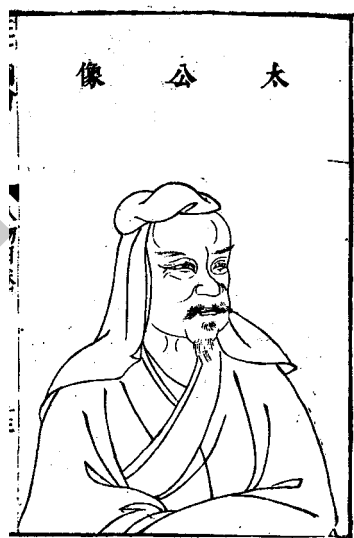
西伯（BC二一五二—一〇五六）は狩に出ようとして占うと、「龍に非ず、黿（みづち。龍の一種という）に非ず、虎に非ず、鸞（ひぐま）に非ず、獲る所は霸王の輔けなり」というのが出た。占いだから分かりにくい文句なのだろう。スゴいものに出合って覇権を得る援助をもらえる

ということのようだ。



文王（三才図会）

渭水という川のとりで二人は出会って大いに悦び、西伯は、「太公（祖父）が、『きつと聖人が出て周に来るだろう。周はそれで興るだろう。』と言っていた。あなたがその人だろう。吾が太公は久しく子を望んでいた。」と言った。それで呂尚を太公望と言う



太公望（三才図会）

（吾太公望子久矣。故号之曰太公望。車に載せていっしょに帰り、師とした。西伯の子の武王が殷を亡ぼして周王朝が成立した。太公望は齊の營丘（山東省淄博市の東北）に封ぜられ、齊の始祖となった（史記・齊太公世家）。武王は西伯に文王と贈り名した。

古川柳では、

喰ひますかなどと文王そばへ寄り（柳多留拾遺・五）

魚籠と竿持たせ車で帰るなり（柳多留・一五）

などと詠んでいる。

夏目漱石『草枕』（二三）に、

岸には大きな柳がある。下に小さな舟を繋いで、一人の男がしきりに垂綸を見詰めてゐる。一行の舟が、ゆるく波足を引いて、其前を通つた時、此男はふと顔をあげて、久一さんと眼を見合せた。眼を見合せた兩人の間には何等の電気も通はぬ。男は魚の事ばかり考へてゐる。久一さんの頭の中には一尾の鮒も宿る余地がない。一行の舟は静かに太公望の

前を通り越す。

とあるように、職業ではなくて魚釣りをする人を太公望と言う。

太公望という名称については、望が名で、太公は齊の人が後から贈つた称とする説もある

（瀧川亀太郎『史記会注考証』に引く崔述の説）。

●覆水盆に返らず

太公望は、世に出る前には本を読んでいるばかりで、稼ぐことをしなかった。それに嫌気がさした妻は離縁して去って行つた。

周の武王が殷を亡ぼした後に、太公望は齊の營丘に封ぜられた。齊に赴任した後に、昔の妻が復縁を求めてきた。そのころには太公望は偉くなつていて、美女など選りどり見どりだつたから（そんなことは記録に無いが）、自分を捨てた古女房などと再縁する気にはなれなかつたのだろう。あるいは逃げた女房にイヤガラセの一つくらいはしたかつたのかもしれない。そこで、盆（水や酒を入れる鉢で、日本でいう平らなボンではない）の水を地にこぼして、女に戻すように言つたが、泥を得ただけだつた。太公望は、「お前が離れてまた合おうとしても、覆つた水は収められない（若能離更合、覆水定難収）」と言つた。これは『拾遺記』などにある逸話、これを古川柳で扱ふと、

となる。この時には文王はすでに死んでいるが、太公望には文王という取り合わせになるのだ。
清の翟灝の『通俗編』（三七）には、これは前漢の朱買臣（？―一〇九）のことになっている。
盆の水を地に覆して、戻すことが出来ないことを示すと、妻は恨みを抱いて死んだ（買臣取盆水覆地、示不能更取之意。妻遂抱恨死）。この著者は、太公望の故事と朱買臣の故事とを詞曲家がいつしよにしたものだと言っている。

覆水の例えは中国人の好みなのかもしれない。『後漢書』（何進伝）に「国家の事は容易ではない、覆水は収められないことを深く思うべきだ（国家之事、亦何容易、覆水不收、宜深思之）」とあり、李白の詩「妾薄命」にも、寵愛を失った女性のことを、「雨落ちて天に上らず、水覆りて再び収め難し（雨落不上天、水覆再難收）」と詠んでいる。

英語では、*It is no use crying over spilt milk.* と言う。ミルクのほうが惜しい気持ちになれそうだが、徳富蘆花『みづのたはこと』（不浄・下）には、

ある爺さんのおかみは、昔若かった時一度亭主を捨て、情夫と逃げた。然し帰って来ると、爺さんは四の五の云はずに依然かみさんの座に坐らした。太公望の如く意地悪ではなかった。この話とは逆なことが書いてある。『柳多留』（二二二）の、

ふく水盆に返り内々で入れ

という句もこれと同じことを詠んだものだ。

● 虎の巻

今でも「教科書ガイド」を「虎の巻」と言っているだろうか。わたくしの生徒だったころには、少し軽蔑の気持ちをこめて言っていた。ふざけて「とらんかん」とも言った。

中国に『六韜』という兵法書がある。太公望呂尚が周の文王・武王に兵法を教えるという設定で書いてある。構成は次のようになっている。

卷一

文韜 開戦の準備や政治問題

武韜 政治的な戦略

卷二

龍韜 作戦の指揮、兵力の配置

虎韜 平野での戦略、武器の使用法

卷三

豹韜 山林・山岳などでの戦略

犬韜 兵の編成・訓練、兵種ごとの作戦

この「虎韜」から「虎の巻」という語が出来たと言う。なぜ「虎」で「龍」や「犬」ではないのだろうか。

『六韜』は、漢時代の遺跡から断簡が出ているので、紀元前二世紀ころには広く行われていたことが分かり、成立は戦国時代かと言われている。

『六韜』はいろいろと伝説のある本だ。その設定から太公望呂尚の著書と言われていた。漢の劉邦りゅうほうの軍師である張良が若い時に黄石公から授けられたという。『万松院殿穴太記』ばんしょういんどのあのうきには、天文十八年（一五四九）六月二十四日に三好宗三が三好長慶と戦って殺されたことを、「さしも宗三は黄石公が虎の巻を伝へ張子房（張良）が大敵をとり拉ひしぐ勢ひありし勇士なれども」とこれを踏まえている。

日本で室町・江戸時代には、源義経が、鬼きいちほうげん一法眼の娘と恋仲になって法眼の秘蔵する『六韜』を学び取ったという事で知られていた。『義経記』（二）には、「太公望が六韜とて、十六卷の書あり」とある。室町時代の物語『みなつる』（下）には、義経が法眼の娘のみなつると契り結び、兵法の巻物を残らず習って、「虎の巻物と申すを一卷残したまひて、皆々火を付けたまひて焼き火災となして捨てたまふ」とある。近松門左衛門の浄瑠璃『最明寺殿百人上臈』じょうろうには、「鬼一が伝へし一卷の太刀風騒ぐ虎の巻、獅子奮迅・虎乱入」とある。「面白く牛の引き出すとらの巻（三枝）」（柳多留・三六）という川柳は、牛若丸（義経の幼名）が虎の巻を

引き出したというのだ。

以上は兵法の秘伝書の『六韜』に関して「虎の巻」と言った例だが、安永七年（一七七六）には田にし金魚作の『傾城買虎之巻』という洒落本（遊里を描く小説）が出ている。兵法から離れて、奥義・秘訣の意味になっている。

辞典に教科書ガイドの意味が載ったのは、金田一京助監修『明解国語辞典』が最初か。昭和十八年の初版は見えないが、二十七年の改訂版に、

①兵法の秘伝書。②講義などのたね本。③教科書の、安易な学習書。とある。

この意味の「虎の巻」は、『学研国語大辞典』に、「④「俗」教科書などを安直に解説し、問題の解答などがのっている参考書で、たいして勉強しなくてもそれだけで用がたせるようにしたもの。」とあるのをはじめとして、だいぶキビしい解説になっている。わたくしも生徒だった時には、そんなものは使わないのを誇りとしていたが、今考えると、使うほうが有効だったのではないかと思うようになっていく。

『六韜』の成立はもっと後の世のことだが、太公望との関連でここに置いた。

教えること、指導することを「指南」と言う。夏目漱石『道草』（二八）の会話に、

「それよか、善光寺の境内に元祖藤八拳指南所といふ看板が懸つてゐたには驚ろいたね、長さん」

「這入つて一つ遣つて来やしないか」

「だつて束修が要るんだからね、君」

という思い掛けない「指南」が見える。

この語は空海の『三教指帰』（下）に、

仰ぎ願はくは、慈悲の大和上、重ねて指南を加へて察かに北極を示したまへ（仰願慈悲大和上、重加指南、察示北極）

とあるなど平安時代から用いられている。

なぜ「南を指す」が教授、指導の意味になるのか。

中国の伝説では、古代に三皇五帝という帝王がいたと言う。五帝の第一が黄帝で、叛乱を起こした蚩尤を涿鹿（直隸省宣化保安州の南）の野で擒にして殺し、諸侯から尊ばれて天子となった（史記・五帝本紀）。南朝宋の裴駰の注釈『史記集解』には在位百年で崩じたとある。

蚩尤との戦いの時に、蚩尤は大霧を作して兵士を迷わせたので、指南車を作つて四方を示した。旧説には周の文王の子で武王の弟の周公が越裳氏が来貢した時に使者が帰り道で迷つたので作つたと、晋の崔豹の『古今注』（輿服）にある。方角が分かるのだから、磁石を装置した車でもあろうか。

周公は武王を助けて殷を滅ぼし、武王の歿後には幼い成王を輔佐し、多くの礼樂制度を定めたとする。孔子の尊敬した人物だ。

方向を指示する指南車から、「指南」が教え、指導の意味になった。



黄帝（三才図会）

明の張鼎思の『琅邪代醉編』（二二）

には、周公のことを記した後に、秦漢時代にはその制を聞かず、後漢の張衡が復元した。その後は亡んで色々な人が造つた。宋武（南朝宋の武帝（在位四二〇—四三二））が関中を平らげてこれを得た。鼓車のように木人を車の上に設けて、手を挙げて南を指す、などがある。明の王圻の『三才図会』に載



指南車 (三才図会)

る南を指さす仙人が乗っている図はそれを描いたものだろう。

日本では『日本書紀』の斉明天皇四年(六五八)に沙門(僧)智踰が指南車を造る、天智天皇五年(六六六)に沙門智由が指南車を献る、とある。具体的なことは書いてない。源順の承平四年(九三四)ころ成立の辞書『倭名類聚抄』や文安三年(二四四六)

の『堪囊抄』には周公のことが記してある。中国の文献でも周公とするものが多い。日本ではそちらと思っていたのだろう。

燕村に、

指南車を胡地に引き去る霞かな (自筆句帳)

の句がある。燕村得意の歴史を詠んだものだ。

日本では周公が作ったと考えていたということにして、ここに入れた。

●天道是か非か

夏目漱石『坊っちゃん』(二二)に、山嵐と坊っちゃんが、赤シャツの策略にかかったことについて、

「あんな奸物の遣る事は、何でも証拠の拳がらない様に、拳がらない様にと工夫するんだから、反駁するのは六づかしいね」

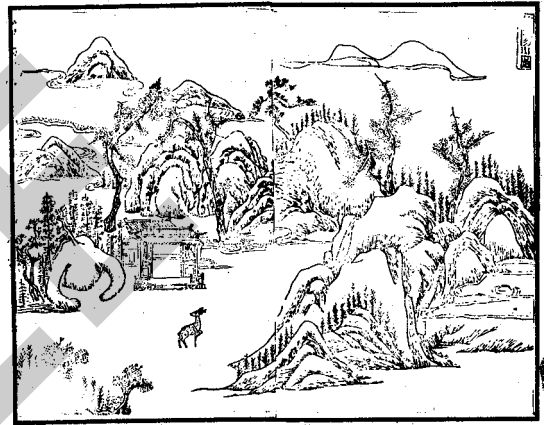
「厄介だな。それぢや濡衣を着るんだね。面白くもない。天道是耶非耶だ」と話し合うところがある。



伯夷 (三才図会)

天道は常に正しいはずだが、自分が不運な目に会うと、はたして天道は正しいのかと疑いたくなる。そういう不遇・不運についての怒りや怨みを感じた時に、「天道是か非か」と言う。

周の武王が殷を亡ぼそうとした時に、伯夷と叔斉の兄弟が、「父の文王が死んで葬らないのに戦いをするのは孝と言え



首陽山（三才図会）

ようか、臣下が主君を殺すのは忠と言えようか。」と言って、これを止めようとした。武王の左右の者は二人を殺そうとしたが、太公望が「義人である。」と言って、その場を去らせた。武王が天下を平定すると、二人は「周の粟（穀物。アワではない）は食わない。」と首陽山に隠れて薇を採って食っていたが、ついに餓死した（史記・伯夷列伝）。

『史記』の著者の司馬遷は、この二人のことを記した後に、天道はだれにも親しくしないけれど、善人の味方をすると言うが、そうすると伯夷と叔齊は善人ではないのか、仁を積み行いを潔くしたのに餓死した、わたくしはたいへん当惑していると述べ、その最後に「天道是か非か（天道は邪非邪）」と感想を記している。司馬遷としては、正しいことを主張したのに宮刑（生殖器を切り取られる刑罰）に処せられた自分の不遇を重ね合わせて、天道は非なのではないかと言いたいのだ。司馬遷の宮刑のことは、後の「九牛の一毛」のところに記す。

古川柳では、

痩せこけた死骸があるとわらび取り（柳多留・一二）

わらびを食ひながらいつぱい（我がまま）を言ひ（柳多留・一五）

とヒヤカしている。

魯迅の小説「采薇」（一九三五年作。『故事新編』所収）では、大家の女中らしい女から、「『普天の下、王土に非ざるなし』ですわ。あなた方の食べている薇にしても、わが皇帝陛下のものでないといえまして？」（竹内好訳）と言われ、わらびを食う元気もなくなり、餓死したのを木こりに発見されるとしている。魯迅が皮肉なことを言ったのかと思っていたが、野婦の発言が動機となって食を絶ったという説は蜀漢の譙周の『古史考』にあり、魯迅の創作ではないそうだが。なお伯はアニ、叔はオトウトを言う。伯父・伯母は親の兄・姉、叔父・叔母は弟・妹だ。もつと細かくは、兄弟の順序は、長を伯、次を仲、又次を叔、末を季と言う。「伯仲」は、長兄とその次の兄、兄弟の意から、優劣の無いこと、似たり寄つたりを言う。魏の文帝曹丕（一八七―二三六）の「典論論文」（『文選』（五二）所収）という文章は、文人が互いに輕蔑しあうのは昔からあつて、「傳毅（四七？―九二）の班固（三二―九二）に於けるは伯仲の間のみ（傳毅之於班固、伯仲之間耳）」それなのに班固は弟に、傳毅は筆を下ろすと休むことができない（だからだと書き続ける）と言っている、と始まる。